

2019 年春季大会・一般研究発表要旨

ジャン＝リュック・ナンシーの共同体論について

安藤 歴

ジャン＝リュック・ナンシーはフィリップ・ラクー＝ラバルトとともに70年代末から「政治的なもの」の概念を主要な問題に据え、1980年には「政治的なものをめぐる哲学研究センター」を設置した。ナンシーはラクー＝ラバルトとともに「政治的パニック」(1979)、「ユダヤの民は夢を見ない」(1980)を発表し、彼自身の著作である「無為の共同体」(1983)の前提となる理論的作業を行っている。本発表では、「政治的パニック」と「ユダヤの民は夢を見ない」において論じられた諸概念が「無為の共同体」にどのように引き継がれているのかについて主題となる。発表者は「無為の共同体」まで「共同体」や「関係」をめぐる概念布置がどのようなものであり、それを通してナンシーがどのように彼自身の存在論的な立場を練り上げていったのか、その一側面を論じる。具体的には以下の内容となる。

ナンシーとラクー＝ラバルトは1979年の「政治的パニック」や続く「ユダヤの民は夢を見ない」において「精神分析」と「政治的なもの」の関係を問うという仕方でもフロイトを論じている。ただし、彼らが行うのはフロイトの注釈的読解ではなく、フロイトが論じた「同一化」(l'identification)という作用を対象関係に先立つものとして取り出すことであった。彼らはその位相を「関係なき関係」、「非社会的社会性」、「変容した社会性」などと呼ぶ。それらは死んだ他者がそうであるような「他なるもの」を我有化する以前に存在するとされ、「同一化」は死んだ他者とそのそばに存在する存在者との関係において働く作用として捉えられている。

この問題系はナンシーが1983年に出した「無為の共同体」に直接的に引き継がれる。「関係なき関係」、「非社会的社会性」、「変容した社会性」は、作品として生み出される共同体よりも根源的な「無為の共同体」として議論の俎上にあげられる。「同一化」は他者の死のような共役不可能な外部との「コミュニケーション」や「分有」(le partage)として、共同体を他者の死を契機に体験することに当たるだろう。

精神分析に比重を置いていた「政治的パニック」での議論は、「無為の共同体」においては共同体の問題として明確化される。ナンシーは共存在分析に基づいて議論をより存在論的な枠組みで練り直している。このことが特に鮮明に表れているのは、共同体の経験が脱自の経験として提示され、それによって死という人間存在の有限性が開示されるという点においてである。ナンシーの存在論的な立場が、他者の死に優位を置きながら、主体の脱固有化を伴う仕方でも措定される脱自の構造として提示されるのだ。

タルドにおけるクールノーの受容について

笠木 丈

「模倣」の概念に依拠して独自の思想を確立したガブリエル・タルドは、社会学者として一般に知られているが、彼の議論の背景には哲学的な基盤がはっきりと存在している。タルドは、哲学者たちの思考を受け取り、彼なりの改変を施しながら、みずからの社会学の哲学的基盤を練りあげていったのである。

タルドが刺激を受けた哲学者は多岐に渡るが、本発表が着目するのはタルドにおけるオーギュスタン・クールノーの受容である。数理経済学の祖でもあるクールノーが哲学的に重要な課題と見なしたのは、偶然概念の解明であった。クールノーは、われわれの無知に由来するような心理的・主観的な偶然性と、事物そのものに備わる客観的な偶然性を区別する。前者のような偶然性とは別に後者の偶然性が実在すると主張することで、クールノーは計算可能な「確率」の概念へと哲学的な基礎を与えるのである。このようなクールノーの偶然論が、いくつかの点でタルドに対して深い影響を与えていることを、本発表はタルドによるクールノー講義『歴史哲学と社会科学』を検討しながら明らかにする。

タルドの思想において、模倣と並んで重要な役割を果たすものとして「発明」の概念がある。模倣は信念と欲望を伝える流れを生み出すが、そうした模倣のいくつかの流れが個人のうちで出会うことで発明が生じるのである。タルドのこうした議論は、クールノーの偶然論を発想源としていられる。クールノーは偶然的な事象においても因果律を否定するわけではないが、そこに複数の因果系列の遭遇を見いだす。それ自体は偶然性を持っていない因果系列がたがいに会うことによって、偶然性が生じるのである。こうした因果律と偶然性の関係は、タルドにおける模倣と発明の関係に重なりあい、そこからタルドは科学の対象となる現象の反復と発明による新たなものの産出や偶然性を両立させているのである。

また、クールノーの偶然論はタルドの信念概念——さらには、それに依拠したタルドの歴史哲学——を理解するうえでもきわめて有益な手がかりをもたらすことになる。信念とは、欲望と同じく、模倣を通して諸個人間で伝達される心理的要素であるが、タルドは信念が徐々に増大していくことを主張する。信念のこうした増大過程と、そこから帰結する調和の完成過程こそが歴史の発展であることをタルドは主張する。こうした議論もまた、クールノーの偶然性概念に原型を持っていることができる。信念に度合いを認め、それが徐々に増大していくというタルドの議論は、クールノーが論じた偶然性や蓋然性＝確率に関する議論を背景として成立しているのである。

利益・権利・徳——トクヴィルの「正しく理解された利益」論

宮代 康丈

近代フランスの道徳哲学において、利益と徳の関係は一大論争のテーマであった。本発表では、この関係をめぐる議論が持つ哲学的意味をトクヴィルの「正しく理解された利益」(l'intérêt bien entendu：以下IBE)論に焦点を当てて明らかにしたい。

利益と徳の関係は、世俗化が加速する啓蒙期以降、道徳の基礎づけを争点として論じられた。道徳の基礎を人間主体に内在する原理に求める哲学として、たとえばエルヴェシウスやドルバックらの唯物論がある。この哲学によれば、道徳の基礎は利益であり、合理的利己主義も道徳的であろう。それに対して、唯物論や功利主義を批判する自由派（コンスタン、スタール夫人など）によれば、理性的な利害計算に還元されえない感情が道徳の基礎をなす。それゆえ、利己主義を克服することこそが道徳であり、合理的利己主義は批判されなければならない。

利益の道徳と感情の道徳の対立を念頭に置きつつ、トクヴィルのIBE論を分析すると、そこには奇妙なねじれのあることがわかる。トクヴィルは唯物論思想を批判する。また、道徳的な偉大さの源は人間の自由であり、その自由の意味は、利害の影響を離れた自律的な行為にあると見なす。しかしその一方で、「個人の利益に訴えて個人の利益を克服し、情念をかきたてる刺戟を利用して情念を制御する」IBEが「あらゆる哲学理論のうちで現代の人の必要にもっとも適するもの」¹⁾であると主張する。つまり、合理的利己主義としてのIBE説を擁護しつつも、道徳を利益の上に基礎づけるわけではない。このような立場は矛盾しているのだろうか。それとも、道徳の基礎づけとは違う哲学的争点がそこには隠れているのだろうか。

本発表では、トクヴィルのIBE論の争点を、道徳の基礎づけ論にではなく、利益と徳に関する政治哲学の議論上に位置づけて明らかにする。すなわち、自由主義と共和主義の対立である。一般に、個人の自由を擁護する自由主義は私益の正当性を認めるのに対し、共和主義は私人にとどまらない公民としての徳を称揚する。この観点から捉えると、IBE論は、私益と公益を、また利益と徳を架橋し、両者の連続性ないし一致を主張するように見える。しかし、トクヴィルは公を私によって、また徳を利益によって説明するわけではない。IBE論の哲学的争点はむしろ、徳と利益の対立関係を権利という第三項の導入によって解消する点にあるという仮説を本発表では提示し、検討したい。

1) Tocqueville, *De la Démocratie en Amérique* (1835/1840), t. II, part. II, ch. VIII (『アメリカのデモクラシー』第二巻(上), 松本礼二訳, 岩波文庫, 2008, pp.214-215)。

エロスの両義性 ——レヴィナスとボーヴォワール——

古怒田 望人

シモーヌ・ド・ボーヴォワールが『第二の性』(1948)の中でエマニュエル・レヴィナスの『時間と他者』(1947)におけるエロス論をジェンダー二元論の観点から痛烈に批判したことは一部のフェミニストを除きあまり注目されてこなかった。けれども、この批判に応じる形で、一方でリュス・イリガライを代表とするフェミニズムからのレヴィナスのセクシュアリティの現象学批判が起こり、他方でレヴィナス研究者側からのこの現象学への擁護が生じた。このような文脈のなかで、フェミニズムもこれまでのレヴィナス研究も見落としてきた点がある。それは、1)なぜ1940年代当時ほとんど無名だったレヴィナスに時代の寵児であったボーヴォワールが注目をし、かくも長い引用と批判を自らの代表作において行ったのか、2)『第二の性』での批判に対して『全体性と無限』(1961)のセクシュアリティの現象学においてレヴィナスはどのように応答したのか、この二点である。本発表ではまず、ボーヴォワールのレヴィナス批判が『両義性のモラル』(1947)で自らが展開したセクシュアリティの現象学の内的批判となっていることを示す。驚くべきことにボーヴォワールは『時間と他者』と極めて類似したエロス論をこの『両義性のモラル』において記述している。つまりボーヴォワールにとってレヴィナスへの批判は自己批判でもあり、レヴィナスのセクシュアリティの現象学の問題はボーヴォワール自身にとっても解決すべき問題だったのだ。このような文脈を踏まえた上で1961年のレヴィナスが『第二の性』——ならびに『両義性のモラル』——に応答し、独自のセクシュアルな自己形成の現象学を提示していることを明らかにする。特に1947年のセクシュアリティの現象学では見られなかった「両義性」という観点がポイントとなる。

ジル・ドゥルーズ『褻』におけるライプニッツの再解釈について — 微分法をめぐる —

佐原 浩一郎

ドゥルーズにとって、ライプニッツは恒常的な参照先である。一度たりともその名が挙げられていない『千のプラトー』においてさえ、いたるところでライプニッツの気配が漂っている。ドゥルーズはつねにライプニッツを要請していた。それにもかかわらず、わたしたちは、彼が決定的な場面でライプニッツを批判している、という印象を持つことを余儀なくされているように思われる。ドゥルーズに対するそのような印象は、果たして彼にとって妥当なものであるのだろうか。

微分法の解釈に関して言えば、ライプニッツは、『差異と反復』においては、無限小のものの守護者として批判されているが、『褻』においては、充足理由律あるいは問題の理論の考案者として肯定的に言及されている。それは単に考察の観点の相違によるものでしかないのだろうか。あるいは『差異と反復』から『褻』にいたるまでのあいだに、ドゥルーズがライプニッツに対する態度を根本的に変更したということを意味しているのだろうか。本発表は、ドゥルーズとライプニッツとの比較を通じて、ドゥルーズが述べているような、微分法における無限小のものですらないdxの存在論的な価値を再検討し、このことが後期のライプニッツ解釈においていかに位置づけられうるかを明らかにするものであり、三つの段階を経る。

まず、『差異と反復』における、微分法に関する三つの原理（規定可能性の原理、相互規定の原理、十分な規定の原理）を検討し、理念的かつ存在論的な水準における諸関係の構成がいかにして進行するのかということについて論じる。次に、『褻』において、先の三つの原理が、新たな構成の下でどのように配分し直されているのかということについて考察する。三つの原理はそれぞれ、矛盾律、充足理由律、相似の原理に対応しているように思われるのだが、それならば、『差異と反復』において、ドゥルーズはなぜライプニッツを批判しなけりばならなかったのか。このような問いを含め、ここでは、ライプニッツの体系のいたるところに発見される微分法の契機を、『差異と反復』における展開に従って整理したい。

最後に、『褻』におけるライプニッツ批判の不在の理由を明らかにする。ここでは、『差異と反復』における微分法に関する記述が、あらゆる問題の解決に原理を与える問いというライプニッツ的な手法によってもたらされたものであるということを示し、ドゥルーズが発見したライプニッツ自身に備わっているプロセスを、つまり『差異と反復』において批判されていたような「無限小のもの」を越えることを可能とするプロセスを『差異と反復』へと送り返すことが課題となる。

リクール『時間と物語』における「歴史」の指示理論

山野 弘樹

本発表の目的は、『時間と物語』第四部第二篇第三章および第五章の記述に焦点を当てつつ、「歴史とフィクションの交叉」という事態を検討することを通して、『時間と物語』における「歴史」の指示理論の独自性とその問題点を明らかにすることである。

リクール自身も「歴史的指示の難問」という表現を用いているように、歴史記述における指示の問題は、少なくとも次の二つの哲学的問題に関わるものである。一つは、指示対象としての「過去」をめぐる存在論の問題である。すなわち、単なる対象の不在ではなく、「もはや無い」の中に「かつて在った」を含意する〈過去の存在論〉はいかにして可能なのか。もう一つは、「歴史」の指示作用をめぐる認識論の問題である。すなわち、過去を形象化する「物語」の機能を探究しつつも、当の形象化作用から逃れ出る過去の存在を志向する〈歴史の認識論〉は、いかにして可能なのか。このように問題圏を整理したとき、〈歴史記述による過去の指示〉という問題が、二つの問題圏の中核に位置していることが明らかになる。

それでは、こうした原理的問題に対して、リクールはいかなる道筋を提示するのか。それが『時間と物語』における「比喩論的アプローチ」である。それは〈歴史記述がフィクションの機能を借用しない〉という前提を退けると同時に、〈歴史記述が過去を指示しえない〉という前提をも退ける「第三の道」を提示するものであった。この険しき道を歩み抜くためにこそ、リクールは、前著『生きた隠喩』において解明された「comme（ような／として）」の存在論的機能の議論を援用しつつ、「それが実際にあったように」というレオポルト・フォン・ランケの表現を再賦活するのである。

しかし、『生きた隠喩』における隠喩の存在論的機能は、あくまで「存在可能性」を語る詩的言語に認められる性質であったはずである。すなわち、リクールも述べるように、歴史が「起こった出来事」を語る一方で、詩（およびフィクション）は「起こりうる出来事」を語るのである。だが、もしそうであるならば、詩的言語の借用を前提とする歴史の比喩論的アプローチは、矛盾する二つの指示作用のベクトルをその内部において抱えていることになる。結局のところ、比喩論的アプローチを採用した場合、歴史の指示作用はいかなるものとして理解されるのであろうか。この問題に取り組むべく、本発表においては『時間と物語』における「フィクション」概念の二義性に着目しつつ、「歴史とフィクションの交叉」という事態を検討することを通して、「歴史的指示の難問」に対するリクールの立場を明らかにすることを試みる。

スピノザ『エチカ』における人間精神の基礎的構造 —「表象[imaginatio]」の理論を中心に—

秋保 亘

スピノザの『エチカ』第二部は「精神の本性と起源について」という表題を持つ。よく指摘されるように、「デカルトがまず「人間精神の本性について」(第二省察)論じ、そののちに「神について」(第三省察)論じるのに対して」、スピノザはこの順序を逆転させる (Gueroult, *Spinoza II-L'âme*, p.7)。スピノザによれば「神はすべてのものども[したがってまた精神]の本質ならびに実在の唯一の原因」[E2P10S/ cf. E1P25]であり、さらに「真の知識が原因から諸結果へと進む」[TIE85]ものであるなら、「哲学する順序」[E2P10S]は、原因である神から結果である精神に向かわねばならない。それゆえ、「精神の本性と起源について」という表題の接続詞「と[&]」を、重く受け止める必要がある。つまり精神の本性を理解するには、何よりもそれがすべてのものどもの原因である神(自然)からいかに産出されるのか、より正確には、身体や他の物体をも含め、自然のうちなるあらゆるものが産出される全体的なプロセスの中で、精神がいかなる位置づけを持つのか、この点を明確にする必要があり、そのうえで、このような構造上の位置づけのゆえに精神が持つことになる諸性格を理解しなければならない。

ところで、デカルトの省察の厳密な出発点は、「私は気づいた[Animadverti]」[ATVII, 17: 2]であった。幼少のころからの誤謬等の自らの思考経験を記憶に呼び戻し、諸学において揺るぎないものを打ち立てるために「一生に一度」[17: 5]の決意を行う〈私〉である。ほかならぬ「この私とは何か」[25: 14]。デカルトはいう。「思惟するものである[...]すなわち、疑い、知解し、肯定し、否定し、意志し、意志せず、また想像もし[*imaginans*]、そして感覚もするものである」[28: 20-22]。

自然全体の産出プロセスに精神を埋め込むスピノザは、こうした、自らの思考経験をほかならぬ自己自身に帰属する経験として捉えるという意味での自己意識とともに、記憶や決意等のいわゆる心的能力の区分をも所与のものとして認めることから出発するのではなく、むしろこれらがいかにして精神の構造上の効果として構成されるかを示すこと、これを自らの課題にするはずである。そのさい議論の中心に置かれるのは、身体の観念という精神の規定にほかならない[E2P13]。そしてスピノザによれば、観念である人間精神のなしうることは、その観念の対象である人間身体のなしうることを、いわばなぞるかたちではじめて理解される[cf. E2P13S]。

本発表は、『エチカ』における人間精神の基礎的な構造とその作動様式を、「表象[*imaginatio*]」の理論に焦点を当てつつ明確化することを試みる。表象のメカニズムこそが、うえに挙げた意味での自己意識、ならびに疑い、肯定、決意、記憶、感覚といった人間精神のはたらきを、身体がなしうることをなぞるかたちで理解させるものにほかならないからである。

ドゥルーズのカフカ解釈の変遷とその意義 ——法にまつわる分析を中心に

西川 耕平

ドゥルーズは『ザッヘル＝マゾッホ紹介』（1967年）以来、一貫して「法」を認識不可能で内容を欠いた純粋な形式であるとみなしている。カントの道徳法則や定言命法を念頭においたこの考えは、ガタリとの共著『カフカ』（1975年）においても保たれている。そうした法のイメージは「掟の問題」や「流刑地にて」そして『審判』といったカフカの作品が一般に印象づけているものでもある。

ドゥルーズ＝ガタリはこの印象を手放しはしないものの、法の超越性や有罪性の内面化を重視するカフカ解釈とは袂を分かっている。むしろ、彼らの解釈にしたがえば、カフカその人自身がそれらを解体しているのであって、超越的な法から逃れ、欲望に内在的な法の領野にとどまる手法を提示しているのだ。そのなかでも最も有力と評価されるのが、判決を宙吊りにしておきながら司法との関係を未決定のまま維持しておく「果てしない引き伸ばし」という手法である。他方で、この文脈において「動物への生成変化」に当たる手法は「再領土化」が予測されるものとして分析されており、次善策とみなされている。

しかし、よく知られているように「動物への生成変化」は『千のプラトー』（1980年）では重要な位置を占める概念である。他方で、『カフカ』においては有望とされた「果てしない引き伸ばし」は、「追伸——管理社会について」（1990年）では、管理社会における恐るべき司法の生活の様態として否定的な状態を指し示すことになる。このように、『カフカ』と『千のプラトー』以降では、カフカの作品から抽出可能な二つの手法に対する評価が逆転していることが見て取られるのである。

このような変更が施されたのはなぜだろうか。ドゥルーズとガタリが「生成変化」の概念をより中核に置くようになったということはすぐに指摘できよう。しかし、それだけでは、もう一つの手法である「果てしない引き伸ばし」に対する評価が失墜したことを十分に説明できない。法とのかかわりにおいて、先の問いに答える鍵を与えてくれるのは、『批判と臨床』（1993年）においてとりわけ先鋭化される、「裁き＝判断（judgment）」と「負債」の問題系だろう。何らかの審級によって裁かれ、負債の意識を背負う仕方で主体が形成される事態をドゥルーズは絶えず問題視していた。「果てしない引き伸ばし」は「裁き」を遅らせることは出来るが、自己そして世界をその裁きから決別させることが出来ない。それゆえ、カフカから引き出された二つの手法に対する評価が逆転するのである。

“管理”の要件としての道徳 ——ドルバックの自然道徳、あるいは、エトクラシー

沢崎 壮宏

18世紀後半、「ドルバック一味」と称される哲学者集団がインテリの耳目を集めたにせよ、普通、その知的リーダーはディドロとされ、ドルバック（Paul-Henri Thiry (Baron) d'Holbach, 1723-78）は哲学者ではなく、むしろ、サロンの主宰者として認知されている。また、『自然の体系』（*Système de la nature*, 1770）は有名で、匿名出版ながら、ドルバックの哲学的業績として今では広く知られているにせよ、その無神論が派手に告発されたことで有名——「ドルバックは今も無神論擁護者の英雄のまま」（*Stanford Encyclopedia of Philosophy*）——なのであって、その内容が深く掘り下げて研究されてきたわけではない。唯物論のレッテルが貼られるにせよ、その上に築かれる道徳哲学にまで言及が及ぶことは多くない。

しかし、ドルバックにとって、唯物論——宗教ではなく「自然」——の上に道徳が打ち立てられる、その可能性を擁護することほど重要なことはなかつただろう。唯物論に同じく与するラ・メトリが、それにもかかわらず百科全書派に敬遠されるのも、ラ・メトリの唯物論が無道徳と結びついている〔とされた〕からである。実際、『自然の体系』以降、晩年のドルバックの著作はすべて「自然道徳」の構築に捧げられている。

そこで、われわれとしては、ドルバックの「自然道徳」を論じてみたい。ドルバックにとって、道徳は「習俗の科学」である。人間行動、とりわけ、その社会的行動の仕組みが解明されなければならない。そのためには、観察可能な人間行動、その結果の集積である歴史に注目して「人間本性」を見究めることが先決である。行動分析を通じて実証的に人間に接近するドルバックに、ナヴィルは「行動主義」の先駆者、人間科学の出発点を見出している（Pierre Naville, *D'Holbach et la philosophie scientifique au XVIII^e siècle*, 1943）。

ドルバックの「自然道徳」に見出されるのはそれだけではない。①進化論者が道徳の起源に据える「互恵主義」が見出される—利得に動かされるだけで道徳的に振舞えるようになるのである。必要なのは、経験を重ねることで練磨される「理性」という予測能力、そして、道徳的な行動に報いる社会デザインである。だから、②「道徳に基づく統治 *éthocratie*」という社会デザインも見出される。安心して協力を交換できるおかげで物品とアイデアの交換が促進されて「産業 *industrie*」が育つ、という寸法である。すると、③能力主義〔成果主義〕も見出される。善悪を決めるのは成果である。行動が結果として社会全体の効用を高めるかどうか、それが道徳的価値の決め手となる。道徳的価値が度外視されるわけではない——「純粋に破壊的な哲学者、あるいは、ただのスキャンダル好き、という〔ドルバックの〕印象を緩和しなければならない」（SEP）。ただし、能動的な生産能力——「手腕 *industrie*」——が社会に貢献する度合で測られる価値が問題となる。道徳の名の下、「手腕」は“管理”されなければならない。——以上の三点を論証する。

Décrire le mouvement de danse : une interprétation de la philosophie biranienne

Mika IMONO

Le propos de cette communication est de démontrer les possibilités et les limites de la notion du « mouvement volontaire » dans la philosophie de Maine de Biran, en se focalisant sur l'interprétation de celle-ci en tant que création, que j'ai présentée dans mon livre en 2018. Afin de mettre en relief notre enjeu, je développerai l'argument en me référant aux discussions récentes phénoménologiques sur la sensation subjective du mouvement de danse.

Dans les études phénoménologiques anglophones sur le mouvement, Gallagher (2005) a démontré la formation pré-réflexive du corps, tandis que Legrand et Ravn (2009), puis Ravn (2017), s'intéressant à la danse, y ont ajouté une nouvelle sorte d'expérience subjective non-réifiant du mouvement. Ce qui semble manquer dans ces discours, c'est, comme le remarque Sheets-Johnstone (2012), la réflexion sur la qualité du mouvement. Comment peut-on discuter sur le mouvement de danse qui est *formed and performed art* (Sheets-Johnstone) ? Sheets-Johnstone elle-même donne trop de privilèges à l'autonomie de danse. Legrand et Ravn n'ont pas ignoré ce problème, mais leur intérêt se focalise plutôt sur le moment d'exécution du mouvement.

L'interprétation du corps propre biranien comme sujet de création nous permet d'y répondre, en y ajoutant une compréhension systématique de l'habitude. En détaillant au fur et à mesure ma recherche précédente sur la philosophie biranienne par l'entremise de Félix Ravaisson et de Kitarô Nishida, nous verrons que cette interprétation nous permettra d'aborder la qualité de mouvement dans le rapport entre la formation du corps et le mouvement actuel.

La communication se terminera par l'introduction d'une nouvelle ouverture : la différenciation des techniques du corps.

脱固有化する反復と外部なきエコノミー
——初期デリダにおけるフロイト論と事後性の概念をめぐる——

福井 有人

本発表の目的は、「ロゴス中心主義の脱構築」を企図していた初期のジャック・デリダにおけるフロイトをめぐるテキストと「エコノミー」の問題とを関連づけることによって、デリダとヘーゲル主義の対峙においてフロイトがいかなる重要性を有していたのかを明確化することにある。

「フロイトとエクリチュールの光景」(1966年)は、形而上学の磁場に回収されないフロイトの思想を探りあてることに注力している。とりわけその作業は、心的なものとの心的装置そのものの構造を表象する二つの隠喩、テキストと機械がフロイトの思想の道行きにおいて次第に導入されてゆくさまをめぐる遂行されており、『心理学草案』『夢解釈』『不思議のメモ帳』についての覚え書きのそれぞれがメルクマールとなる。『心理学草案』は、 ϕ/ψ 系という二つのニューロン装置を通して心的装置を描写することを狙いとしている。注目すべきは、フロイト自身が自覚的であるように、記述に綱渡り的な部分(ψ ニューロン間の通道の差異によって記憶が形容されること、さらには ω ニューロンの導入など)があり、まさにその部分が記述全体を牽引し立体的に仕立て上げてゆく推進力となっているという点である。すなわち、デリダの見立てでは、生体の外部に存在する何ものかを原理や目的として設けるのではない、いわば外部なきエコノミーとして心的装置を説明することが、「心理学草案」の至上命題となっているのであり、こうした推進力がのちのフロイトのパラダイムを準備する。「フロイトは非表音的なエクリチュールの隠喩を単に使用しているのではない」と述べるデリダは、テキストと機械という二つの隠喩を採用することじたいが、フロイトのパースペクティブを拡張してゆくこと(“frayage”、道を跡づけること)に直結している、と見ているのである。

本発表は、デリダが提示するフロイトの思想の段階的な発展を検討する。さらに、『心理学草案』において登場する「事後性Nachträglichkeit」の概念にデリダが高い評価を与えていることに注目しつつ、形而上学の脱構築にとって梃子となる概念、いわば「それ自体として」が不可能であることの謂いとして「事後性」が拡張されていることを指摘する。

初期デリダのフロイト読解はラカンとの間におこるのちの論争の伏線となってもいるが、「フロイトとエクリチュールの光景」をラカンとの論争というパズルの一ピースとみなすことは、ヘーゲル主義との対峙というモチーフを背景に退かせ、フロイトのテキストに加えられるデリダによる操作を希釈してしまうことになる。したがって本発表は遡行的な読解を施さずに、あくまで形而上学の脱構築という文脈に身を置きながら、注釈のスタイルをとって論を進めることにしたい。

精神にとって身体論はいかなる意義をもちうるか ——デカルトとスピノザにおける人間身体の通時的同一性について

立花 達也

本発表では、人間身体の通時的同一性に対するデカルトとスピノザの異なるアプローチを見ることによって、両者（とりわけスピノザ）の身体論が「精神」の概念にとっていかなる意義をもっているのかを明らかにしたい。デカルトは人間身体の通時的同一性については特権的に、精神（魂）との合一において説明しようと試みるのだが、それに対してスピノザは、あくまで身体そのものにおいて通時的同一性を説明しようとする。本発表では主張したいのは次の点である。すなわち、この説明の違いは、デカルトは精神から身体へ向かうのに対して、スピノザが身体から精神へ向かう理路をたどっているということを示している。要するに、我々の精神にとって身体論がどのような役割を担うのかが二人のあいだで異なっているのである。

デカルトはメラン宛ての書簡（1645年2月9日）において、人間身体の通時的同一性は、魂との合一によって形相を与えられることによって説明されるとする。これに対してスピノザは『エチカ』第二部の物体論において、個体的物体について、その諸部分のあいだの関係が維持される限りにおいてその同一性が維持されるという議論を展開している。これは、精神との合一を考慮に入れることなく、延長属性において物体の通時的同一性を説明しようと考えられる。しかし先行研究では、とりわけデカルトにおいては自己の人間身体についての議論が物体一般についての物体論に還元されえないという点が見過ごされており、それゆえ、スピノザの物体論の優位を一方向的に宣言することに終始しているように思われる。だが、このような比較は本来なら、彼らにとって身体論の立ち位置がどのように異なり、また重なり合うかを議論してからでなければ、成り立ちえないだろう。そこで本発表では、デカルトとスピノザの身体論を比較するための土台を整備する作業を行い、それを通じて、両者が本当の意味で異なっているのはいかなる点においてであるのかを浮き彫りにする。それによって、迂遠ではあるが、スピノザが人間身体をあくまで物体一般と同じ水準において論じていることが、彼が自己の精神をどのようにとらえるのかに関わっているということを説得的に示したい。

本発表は以下のように進む。第一に、デカルトの物体論における通時的同一性に対する、先行研究のアプローチを確認する。それに対して批判的な仕方第二に、デカルトが物体一般と人間身体について論じる文脈を、精神にとっての身体論の意義という観点から明らかにしつつ、彼は同一の身体を二つの水準において論じていることを確認する。これとの対比によって最後に、物体一般と人間身体を同一の水準において扱うスピノザの身体論がどのように際立っているのかを示す。